出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

第14集

上塩冶横穴墓群第33支群

２００４年3月

出雲市教育委員会

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書

第14集

上塩冶横穴墓群第33支群

２００４年3月

出雲市教育委員会

金銅装大刀全体写真

金銅装大刀拡大写真

序

出雲市には、貴重な埋蔵文化財が数多くあります。とりわけ、上塩冶横穴墓群のある丘陵付近には、国指定史跡の上塩冶築山古墳、地蔵山古墳などの重要な遺跡が密集しています。

今回報告する上塩冶横穴墓群第33支群は、浄福寺の移転に伴い平成２年度に調査しましたが、盗掘があったにもかかわらず、横穴墓からの出土例は少ない金銅装大刀が出土するなど貴重な成果が得られました。

本書が埋蔵文化財に対する一層の関心と理解を得るための資料として役立てば幸いです。

最後に、本書の編集にあたりご協力いただきました関係各位に対し、心から御礼申し上げます。

平成16年３月

出雲市教育委員会

教育長　加　藤　武　行

例　　言

1．本書は、浄福寺（住職　田中良英）の移転に伴う土地造成中に発見された上塩冶横穴墓群第33支群１号穴、２号穴の緊急調査の報告である。

2．発掘調査は、平成２年（1990）12月20日から平成３年（1991）１月29日までの約１ヵ月にわたり実施した。

3．調査体制は次のとおりである。

調 査 主 体　　出雲市教育委員会
事　務　局　　山本順一（社会教育課長）
調査担当者　　川上　稔（社会教育課主事）

4．本書の編集・執筆には主として川上　稔（文化企画部文化財室長）があたったほか、全体の編集は遠藤正樹（文化財室副主任主事）が担当した。

また、金銅装大刀については島根県埋蔵文化財調査センターの松尾充晶氏に玉稿を賜ったほか、金銅装大刀の保存処理を委託した株式会社トリアド工房からは保存処理及び修復についての報文を賜った。記して謝意を表する。

5．本書の挿図に使用した方位は磁北を示す。

6．発掘調査にあたっては、土地所有者の浄福寺住職田中良英氏のご理解ご協力があったほか、県教育庁文化課の指導を得た。

7．発掘調査、遺物トレースについては、次の方々の協力を得た。

発掘調査　　松山智弘、米田美江子（出雲市臨時職員）
　　鐘推蔵吉、岡省吉（作業員）
遺物トレース　　吹野初子

8．本書掲載の遺物は、出雲市教育委員会が保管している。

目　　次

巻頭カラー
序
例言
目次
挿図目次

１．位置と環境……1

２．調査に至る経緯 ……5

３．調査の概要……6
（１）１号穴
（２）２号穴

４．金銅装大刀について ……9

５．上塩冶横穴墓群出土金属製品の保存処理及び修復 ……16

図版 …… 図版１～５

抄録

挿　図　目　次

第１図　　周辺の遺跡……1

第２図　　上塩冶横穴墓群支群分布図……3

第３図　　第33支群位置図……5

第４図　　１号穴実測図……6

第５図　　１号穴出土遺物実測図……7

第６図　　２号穴出土遺物実測図……8

第７図　　金銅装大刀実測図……13

第８図　　金銅装大刀解説図……15

第９図　　関連装飾付大刀実測図……16

1．位置と環境

出雲平野は、出雲砂丘の内側の潟湖が斐伊川、神戸川の二大河川によって沖積され形成された日本海側屈指の沖積平野である。

上塩冶横穴墓群のある出雲市上塩冶町は、出雲平野西部の東側丘陵部とその山麓にあたり、ＪＲ出雲市駅から南へ２㎞の市街地近郊に位置する。西には島根大学医学部があり、南には神戸川が東から西に深く下刻して流れ、付近では斐伊川と神戸川を結ぶ放水路工事が進行している。

第１図　周辺の遺跡

１、上塩冶横穴墓群　　２、出雲大社境内遺跡　　３、青木遺跡　　４、大寺１号墳　　５、上長浜遺跡
６、山地古墳　　７、神門横穴墓群　　８、北光寺古墳　　９、矢野遺跡　　10、小山遺跡
11、白枝荒神遺跡　　12、天神遺跡　　13、高西遺跡　　14、塚山古墳　　15、今市大念寺古墳
16、西谷墳墓群　　17、上塩冶築山古墳　　18、上塩冶地蔵山古墳　　19、半分古墳
20、古志本郷遺跡　　21、下古志遺跡　　22、宝塚古墳　　23、地蔵堂横穴墓群　　24、妙蓮寺山古墳
25、放れ山古墳　　26、刈山古墳群　　27、小坂古墳

出雲平野西部で集落が爆発的に営まれるのは弥生時代中期頃からであるが、出雲大社の東方の菱根遺跡と出雲砂丘地に立地する上長浜遺跡が最も古く、縄文時代早期末の繊維土器が出土している。

縄文時代後～晩期には次第に遺跡も増え、平野の微高地上にもみられるようになってくる。上塩冶地域にも三田谷Ⅰ遺跡や築山遺跡などが山麓の沖積段丘や丘陵裾にみられる。

弥生時代には、砂丘内側の潟湖をとりまくように集落が形成されている。なかには矢野遺跡や多聞院遺跡のように貝塚を伴う遺跡もみられ、ヤマトシジミを主とした貝類が貴重なタンパク源となっていた。また、平野の旧自然堤防上に立地する天神遺跡、古志本郷遺跡、下古志遺跡などでは、集落を取り囲む環濠がみられる。北山山麓の扇状地に立地する青木遺跡からは初期の四隅突出型墳丘墓が検出され、近年相次いで発見されている旧自然堤防上の四隅突出型墳丘墓とともに注目を集めている。上塩冶付近では、三田谷Ⅰ遺跡から竪穴住居跡のほか出雲地方では珍しい方形周溝墓も検出されている。

古墳時代になると、前期末には平野の周辺に、筒形銅器や鏡をもつ山地古墳や県内最古の前方後円墳である大寺１号墳が築造される。中期には南の丘陵上に全長65ｍの北光寺古墳などがみられるが、後期後半になると神戸川右岸の丘陵沿いに大念寺古墳、築山古墳、地蔵山古墳などの首長墓が数多く築かれるとともに、左岸の丘陵には放れ山古墳、妙蓮寺山古墳、宝塚古墳などが築かれ、全国有数の横穴式石室墳群となっている。また、７世紀前後から横穴墓が盛行するのもこの地域の特色であり、上塩冶横穴墓群がその代表格である。主として凝灰岩質の軟岩に掘られているが、中には金糸や装飾大刀を副葬する横穴もある。上塩冶地域には、築山古墳や地蔵山古墳の有力墳があり、出雲地方西部の中心地となっていた。

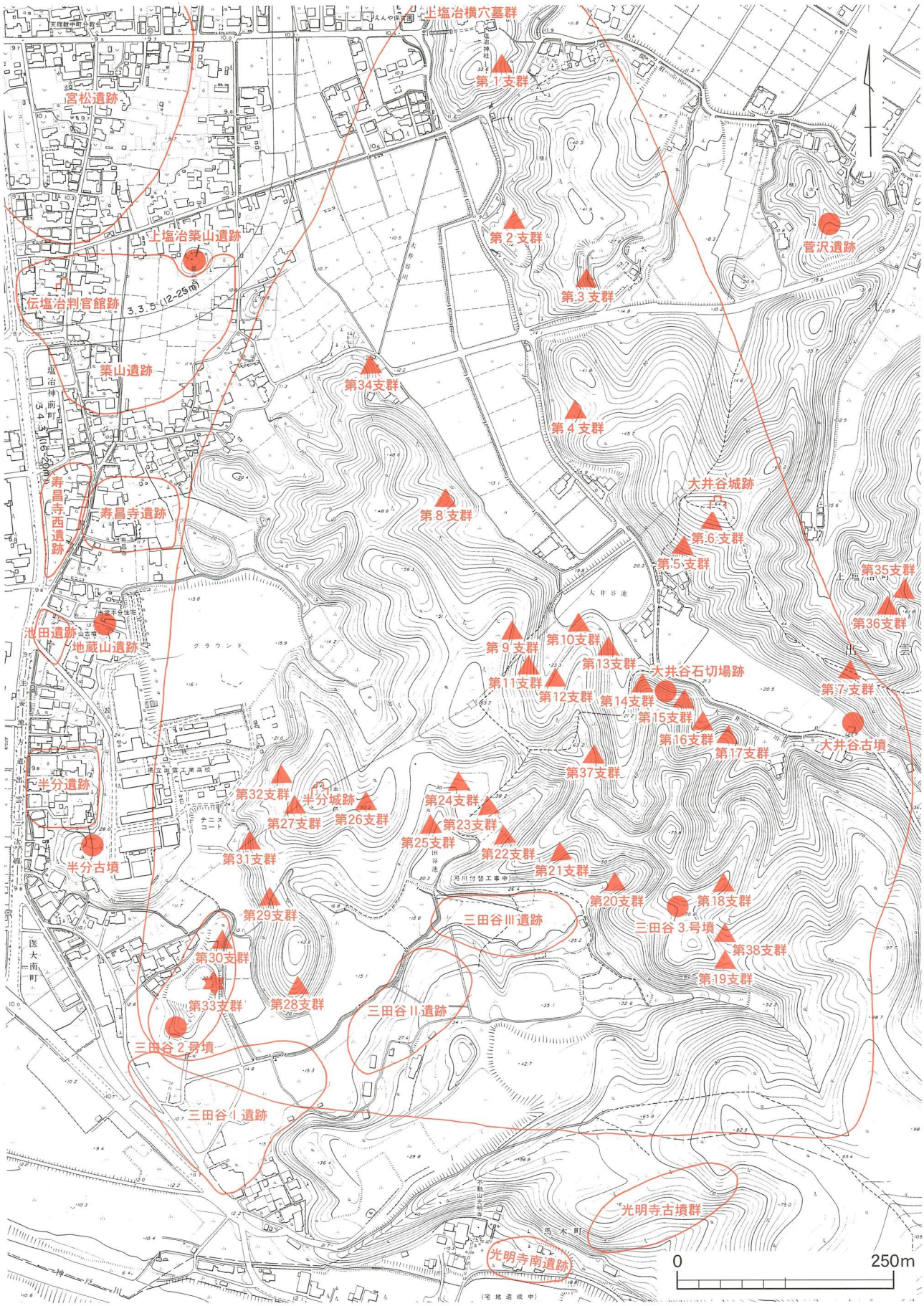
奈良時代では、古志本郷遺跡で大規模な掘建柱建物跡群が検出され、『出雲国風土記』に記載された神門郡家の郡庁に比定されている。また、出雲郡の出先機関とみられる青木遺跡からは600点にも及ぶ多量の墨書土器のほか、国内最古の神像、絵馬、売田券木簡などが発見されている。さらに、上塩冶地内の三田谷Ⅰ遺跡からは、墨書土器のほか「高岸神門」などの木簡、緑釉陶器などが出土し、神門郡の出先機関とみられている。

これらの役所的機能をもつ集落のほかにも、上長浜貝塚のような専業集落もある。上長浜貝塚は、出雲砂丘下に埋没していた遺跡で、古代から中世初期にわたり厚いところでは1.5ｍもの貝塚が形成され、ヤマトシジミを主とする貝類のほか、魚骨も大量に含まれ、漁村として機能している。

また、塩冶地内で特徴的なものとして古墓がある。光明寺３号墓は、石製骨蔵器をもつ古墓で墳丘がある特異な構造をもち、古墳時代から奈良時代への火葬墓の過渡期の様相を示している。石製骨蔵器は県内でも発見例が少なく、塩冶、朝山地域に集中している。

中世には、出雲守護職の佐々木氏が塩冶郷に守護所を置き出雲国の中心地となり、交通・軍事上の要衝として塩冶地域が再び大きく歴史の表舞台に登場する。また、蔵小路西遺跡からは、地域の土豪朝山氏の館跡も検出されているほか、荻杼古墓からは青磁の優品が出土している。さらに、仏教関連遺跡として、上塩冶町の般若寺付近の大井谷Ⅱ遺跡からは寺院関連の遺構、遺物が出土している。

中世の山城は市内の各所に点在しているが、上塩冶地域には向山城、大井谷城、半分城があり、なかでも向山城は、鎌倉時代の悲運の武将、塩冶判官高貞の居城ともみられている。



第２図　上塩冶横穴墓群支群分布図

（『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集』から転載）

上塩冶横穴墓群一覧表

支群	確認数	主体部	形態	岩盤	副葬品	調査歴	文献	備考
1	1		家型妻入				文献1	
2	2				須恵器、耳環		文献1	消滅
3	10		家型妻入・アーチ		須恵器		文献1	半壊
4	2			凝灰岩	須恵器、耳環		文献1	半壊
5	2			凝灰岩			文献1	
6	5	屍床	家型妻入	凝灰岩	須恵器、土師器、鉄鏃、鉄釘、直刀	美多実55	文献1	
7	4		家型妻入・ドーム	凝灰岩	須恵器，銅製品	県教委94,96	文献1,5,6,11	消滅
8	7	屍床	家型妻入	凝灰岩など	須恵器、耳環、大刀、刀子、象嵌鍔	市教委01	文献1	消滅
9	1		家型妻入	凝灰岩			文献1	
10	5		平天井	凝灰岩			文献1	
11	2			凝灰岩			文献1	
12	11		アーチ	凝灰質砂岩	須恵器	県教委96	文献1,6,11	消滅
13	4		アーチ	凝灰岩			文献1	
14	10		家型妻入・アーチ・平天井	凝灰岩など	須恵器、土師器、耳環、刀子、玉類	県教委92	文献1,2	消滅
15	4		家型妻入・アーチ	凝灰岩など	須恵器、鉄製品	県教委92	文献1,2	消滅
16	3		家型妻入	凝灰岩	須恵器	県教委93	文献1,2	消滅
17	14	屍床	家型妻入・家型平入	凝灰岩	須恵器、耳環、鉄鏃、直刀、銅製品	県教委78,市教委96	文献1,9	消滅
18	2		家型妻入・平天井？	凝灰岩	須恵器、小玉	市教委97	文献1,9	消滅
19	4		家型妻入、アーチ	凝灰岩	須恵器、土師器、鉄製品	市教委 97	文献1,9	消滅
20	5	屍床	家型妻入・家型平入	凝灰岩	須恵器、大刀	県教委92	文献1,3	消滅
21	10	屍床	家型妻入・アーチ・ドーム	凝灰岩	須恵器、鉄鏃、鉄釘、直刀、金糸、石製品	県教委92	文献1,3	消滅
22	21	石床・屍床	家型妻入	凝灰岩など	須恵器、土師器、金銅装大刀、馬具、金環、玉類、鉄鏃、鉄斧、鉄刀、刀子、鉄釘	県教委79,95	文献1,5,8,11	消滅
23	7	屍床	家型妻入・アーチ	凝灰岩など	須恵器、土師器、鉄器、耳環、鉄鏃	県教委95	文献1,5,11	消滅
24	1		家型妻入	凝灰岩			文献1	
25	2	側壁に刳込	家型妻入	凝灰岩			文献1	
26	1		家型妻入	凝灰岩			文献1	
27	4		家型、アーチ	凝灰岩	須恵器、金環	市教委79	文献1,4	消滅
28	2		家型妻入	凝灰岩など	須恵器、鉄釘		文献1,6,10	消滅
29	2		家型妻入	凝灰岩			文献1	
30	0					市教委90	文献1	消滅
31	2	家型石棺	家型妻入				文献 1	
32	12	家型石棺	家型妻入・アーチ	凝灰質砂岩		県教委62,96	文献1	
33	8	石棺	家型妻入・アーチ		須恵器、大刀、耳環、玉類、金銅装大刀	市教委90,県教委96	文献6,11	消滅
34	6	礫床・棺台？	アーチ	凝灰質砂岩(?)	須恵器、土師器、銀環、刀子	市教委92,93,96	文献12	消滅
35	1		家型妻入	砂岩	須恵器、土師器、耳環、鉄製紡錘車、ガラス小玉、メノウ勾玉	県教委94	文献5,11	消滅
36	3		家型平入・ドーム		須恵器、大刀、馬具、責金具	県教委94	文献5,11	消滅
37	1		アーチ		鉄釘、鉄滓	県教委	文献11	消滅
38	3		家型妻入	凝灰岩	須恵器、丹塗土師器	市教委97	文献9	消滅
	184							

文献

1 勝部昭・西尾克己編 『上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1980年
2 鳥谷芳雄編 『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 大井谷石切場跡・上塩冶横穴墓群第14支群・上塩冶横穴墓群第15支群・上塩冶横穴墓群第16支群』 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1997年
3 林健亮編 『上塩冶横穴墓群第20・21支群 斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1995年
4 西尾克己編 『中国電力高圧送電線鉄塔工事にともなう半分城跡横穴墓群発掘調査報告』 出雲市教育委員会 1979年
5 島根県教育委員会編 『島根県教育庁文化課埋蔵文化財調査センター年報Ⅲ』 1995年
6 島根県教育委員会編 『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅳ』 1996年
7 島根県教育委員会編 『島根県教育庁文化財課埋蔵文化財調査センター年報Ⅴ』 1997年
8 角田徳幸・西尾克己 「出雲・上塩冶横穴群第22支群」『島根県埋蔵文化財調査報告書 第ⅩⅡ集』 島根県教育委員会 1986年
9 遠藤正樹ほか編 『斐伊川放水路建設予定地内発掘調査報告書Ⅰ 上塩冶横穴墓群第17・18・19・38支群・大井谷Ⅲ遺跡・石切場跡1・2・三田谷3号墳』 建設省中国地方建設局出雲工事事務所・出雲市教育委員会 2000年
10 久保田一郎編 『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 上塩冶横穴墓群第28支群』 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1999年
11 守岡正司編 『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 上沢Ⅱ遺跡・狐廻谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群（第7・12・22・23・33・35・36・37支群）』 建設省出雲工事事務所・島根県教育委員会 1998年
12 松山智弘ほか編 『上塩冶横穴墓群第34支群発掘調査報告書』 出雲市教育委員会 1998年

（『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集』から転載）

2．調査に至る経緯

上塩冶横穴墓群は、出雲工業高校の東方丘陵に広く分布する県内最大級の横穴墓群である。この一角にある浄福寺が放水路事業に伴ってすぐ北側に移転することになったが、土地造成中に横穴墓が２穴発見されたほか、付近には瓦片や窯道具が散乱していたため、工事を一時中断し緊急に調査を実施することになった。

なお、発見された横穴墓群は新発見であったため、上塩冶横穴墓群第33支群とした。（その後、平成８年の県の調査によって、８号穴まで確認されている。）

横穴墓は平成２年12月９日に発見され、同月12日に土地所有者である浄福寺（住職　田中良英）から遺跡発見の届出があった。緊急に調査を行う必要があったため、同月20日から発掘調査に着手し、平成３年１月29日に終了した。

そして発掘調査終了後、残土は馬木土地区画整理事業地に搬出され、２穴の横穴墓は消滅している。

第３図　　第33支群位置図

3．調査の概要

上塩冶横穴墓群は、出雲市街地の南方、神戸川右岸の県立出雲工業高校周辺の丘陵地に広がる県下有数の大横穴墓群を形成し、これまでに38支群184穴が確認されている。

このうち、今回報告する第33支群は、出雲工業高校南の小さな独立丘陵にある。この独立丘陵には、平成８年の県の調査で第33支群３～８号穴のほか、横穴式石室をもつ古墳１基、石棺１基、石組み遺構１基、火葬墓１基などが検出されている。さらに、東側には権現山城跡があり、その間の小さな谷を三田谷の谷奥から小河川が流下する。

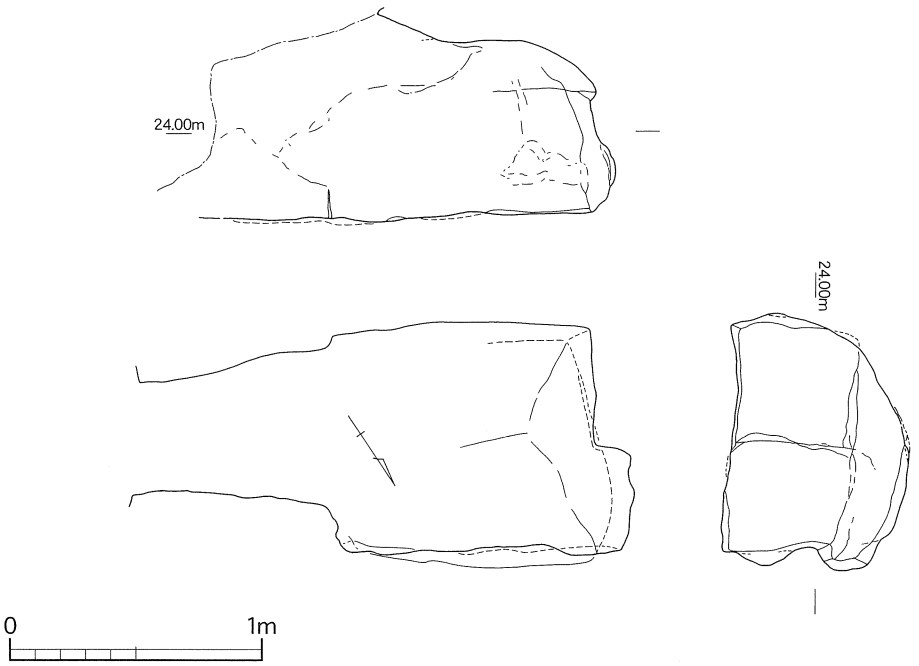
第33支群は独立丘陵の東斜面にあり、８穴で構成されている。このうち、平成２年12月から平成３年１月にかけて市が調査したのは独立丘陵の北半分にあたり、浄福寺の移転に伴う土地造成中に発見された１号穴、２号穴である。県が調査した３～８号穴はその南側に横並びにある。

１号穴

第33支群のうち、最も北側にある横穴墓である。軟質土に掘られ、東に開口している。工事によって発見されたときには横穴墓はほぼ塞がっていたが、玄室内部には新しい流入土のほか、石塔が散乱していた。流入土の下には、一部に薄く黒褐色土が残っていたが、その中から金銅装大刀などの遺物が出土している。

また、玄室天井部の前半分は崩落し、玄門部、前庭部もかなり損われていた。

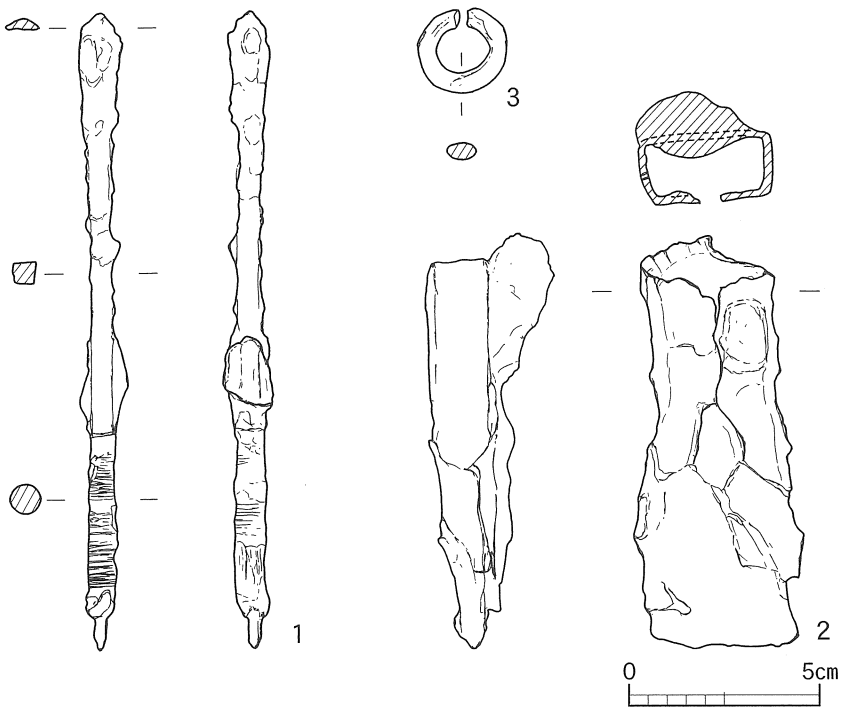
玄室形態は妻入家形で平面形は長方形を呈し、幅1.8m、高さ1.3m、奥行2.1mを測る。玄門部は



第４図　１号穴実測図

幅0.9ｍであるが、玄室寄りがやや崩れている。

遺物（第５図）は、すべて玄室内の床面から出土している。遺物としては、金銅装大刀、耳環のほか、鉄製品として鉄斧、鉄鏃が各１点ある。須恵器が認められなかったのは、盗掘時に持ち去られたものと考えられる。このうち、金銅装大刀は中央やや玄門寄りから出土した。鉄鏃（１）は１点出土している。全体の形がわかるもので、細身で断面方形の長い頸部を持っている。矢柄の一部が残存しており、茎に矢柄を差し込み、糸で巻き漆で固定しているようである。鉄斧（２）は１点出土している。ほぼ完形の小型のもので、全体の錆化が進んでいるが、方形の袋部をもつ両肩式の鉄斧である。全長10.9cmのうち、袋部長が約６cm、刃部幅は約４cmである。耳環（３）は１点出土している。径2.3cmの銅芯鍍金製で、断面は楕円形を呈する。鍍金の残りが悪く、かなり金箔が剥がれている。



第５図　１号穴出土遺物実測図
（金銅装大刀を除く）

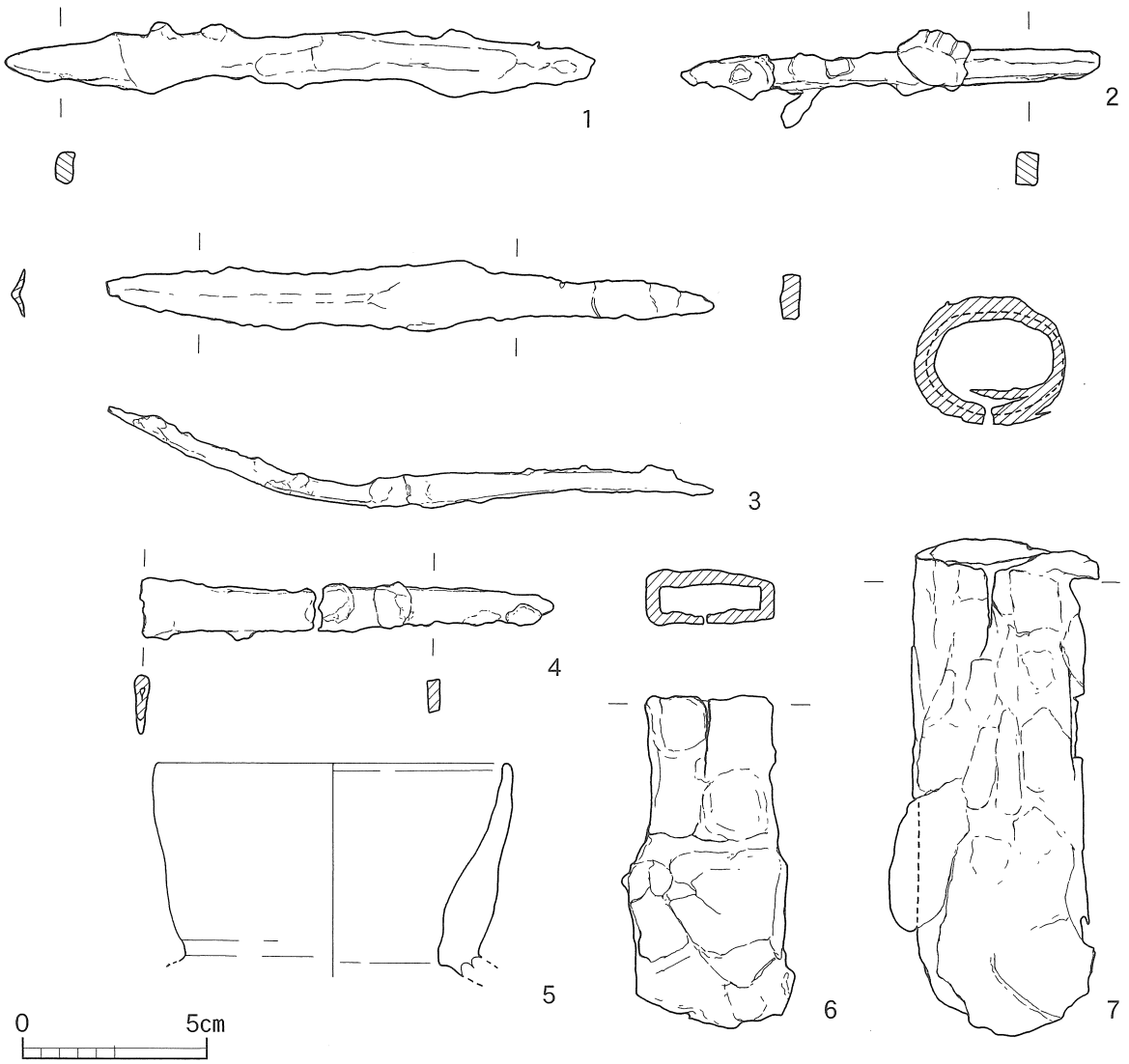
２号穴

１号穴のすぐ南側に検出した横穴墓で、１号穴と同じく玄室と玄門部に多量の流入土があり、中には石塔が含まれているほか、表土付近は窯用具に広く覆われていた。

玄室形態はアーチ形で、平面形は長方形を呈し、幅1.3m、高さ1.0m、奥行1.9ｍを測る。

遺物（第６図）は、鉄製品６点のほか、須恵器片が１点出土している。

鉄製品は、鉄斧、鉇、鉄鏃、刀子がある。鉄鏃（１）は、残存長14.2cmで、鏃身に断面方形の長い頸部をもつ。鉄鏃（２）は、１よりも小型で、断面長方形の長い頸部をもつ。鉇（３）は、全長16.7cmのほぼ完形品である。刃部は中央に鎬がある両刃であり、刃部長8.0cm、幅は中央部で1.5cmを測る。断面長方形の茎部は、刃部から離れるほど細くなっている。刀子（４）は、残存長11.2cmで、刃部のほとんどを欠いている。刃部幅は1.7cmで、断面長方形の茎をもつ。須恵器（５）は、瓶か壺の口縁部である。１、２号穴で唯一出土した須恵器であるが、盗掘されて多くは持ち去られたものとみられる。鉄斧（６）は、全長9.0cmの小型品である。鉄斧（７）は全長13.0cmで、袋部の断面が楕円形を呈する。袋部長5.5cmで、小さな肩をもつ。錆化によって大きく損なわれている。



第６図　２号穴出土遺物実測図

まとめ

第33支群は、軟質土に掘られた横穴墓で、かつほとんどの横穴墓玄室の天井形態が丸天井かアーチ形である。また、出土須恵器からみても、ほとんどの横穴墓が出雲西部でも導入期にあたる出雲４～５期にあたり、上塩冶横穴墓群のなかでも古い時期に属するものと考えられている。（注１）１、２号穴には須恵器がほとんど残されていなかったが、１号穴の玄室天井形態が家形妻入であることから、33支群の中では、やや新しい要素を含んでいる。

遺物としては、１号穴からは、横穴墓への副葬は極めて少ない金銅装大刀が出土している。180穴をこえる上塩冶横穴墓群のなかでも、22支群１号穴で確認されているに過ぎないことからみても、被葬者はかなりの有力者に結びついた人物と考えられる。また、比較的鉄製品が多いことも特徴といえる。

注　1　『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会　1998

4．金銅装大刀について

（1）遺存状態

1振り分の金銅装大刀が出土している。大刀の両端、すなわち柄頭と鞘尻を欠き、残存状態はあまり良くない。現状での残存長は53.3cmである。

柄頭から柄間の端部（柄縁）にかけて完全に欠失しているため、柄頭型式は不明である。また鞘間の筒金物より先、鞘尻にかけての外装も破損し刀身が露出した状態である。鞘装具は佩表側に金銅製伏板が良好に残るのに対して、佩裏には鞘装具が全く残されていない。

出土時の状況は、玄室の中央やや玄門寄りに、刃を上にして起こした状態であった（写真図版3）。埋葬された人体側部に沿わせた位置ともとれるが、以下の状況からみて追葬時の移動や片づけなどの改変を受けた可能性がある。その根拠はまず、柄頭と鞘尻が失われていた点。調査時にはこれらの部位は、痕跡すら残されていなかった。拵えから考えて、鞘尻などには金属製の装具が用いられていた可能性が高い。こうした金属製の装具が、一部分だけ痕跡を残さず完全に腐朽してしまうとは考えられない。なお、これらの失われた部位は玄室内のどこにも残されていなかった。次に、鞘間の筒金物を境に刀身がくの字に折れて屈折している点。これは刀身の鉄が可塑性を保っていた状態、すなわち副葬時からそれほど時間を経過しない時点で強い力が加わった結果とみれる。最終的な出土姿勢では刃を上に起こした状態だったため、自重などによる経年変化とも考えられない。

以上の状況から、この大刀は追葬時に柄頭と鞘下半、すなわち大刀の両端を玄室外へ持ち出されたと考えられる。特に刀身が屈折している状況からみて、鞘下半は折り取るように意図的に破砕された可能性が高い。

（2）各部の特徴

以下では、細部の特徴や法量等を記述する。なお、文中の（○囲み数字）は第8図に対応している。

柄頭　柄頭は前述のとおり残されていない。拵えの特徴から双龍環頭であった可能性は高いが、円頭大刀にも同様の装具をもつ例が少ないながらあるため、特定できない。

柄　柄は金銅板（銅地鍍金板）巻き。金銅板は鑞付け痕とみられる刃側の接合線で直線的に割れる（①）。柄に巻かれた金銅板には連続タガネ打ちによる文様線刻が施される。文様は佩表と佩裏とで異なる。佩表には連接された渦巻きを不規則に配置。佩裏には単位の大きい蕨手文を向きをそろえて並べる。蕨手文は5単位分残存。本来はこれに対置する反対向きの蕨手文を配列した、2列の文様構成であったとみられるが背側の列は破損し残っていない。柄巻きの金銅板は全体の4分の1（佩裏の背側）を破損し、その下にある柄木の木質と刀身の茎（②）が露出している。柄木の木質は完全に錆と置き換わっており、かろうじて繊維方向がわかるのみ。合わせ目などは観察できず、柄の構造は不明。刀身の茎を柄と固定するための鉄製目釘が1箇所に打たれている（③）。目釘の先端は両側が叩きかしめられていたらしく、高まりとなっている。柄の残存長89㎜（責金具除く）、柄縁から先を欠くが、接合しない小片（④）がある。木質に金銅板を被せたもので、蕨手文あるいは連続渦巻きをタガネ打ち線刻する。柄の一部である可能性が高いと考えて図示した。裏面の木質を観察すると、繊維方向が

直交する異なる部材を組み合わせた面（⑤）がある。この面が何に由来するかは、破片が小さく判然としない。

柄元責金具　柄元には、鍔に接して幅の狭い責金具が配される。幅2.5㎜、厚さ1.9㎜。全周長74.5㎜（内法）。断面形は中実のほぼ長方形で、表面にあたる一辺のみがゆるやかな弧をもつ（⑥）。柄方向への鍔のあそびを押さえて固定する機能を持つ。柄巻きの金銅板の端はこの責金具の下にもぐっている。

鍔　金銅製（銅地鍍金）の無窓鍔で、いわゆる喰出鍔である。平面倒卵形で（第７図）、刃側はあまりとがらず緩やかな曲線を描く。長軸径50.2㎜、短軸径36.4㎜、錆の剥がれた部分で厚さ1.8㎜。

鏃（はばき）　鏃は金銅製で、鍔とは本来の位置関係からずれた状態で錆着している。刀身が関（まち）部分で折れていたために、保存処理前には鞘から抜いた状態で観察することができたが、現在では接着されている。処理前にみることができた鏃の小口面、すなわち鞘木と接する面には銅サビが乗らず金装が観察できた。寸法は、長径が小口側で28.5㎜、鍔側で30.1㎜。短径が小口側で16.3㎜、鍔側で18.2㎜。成形時の鍛接線や、鑞付けなどの接合線などは観察できない。

鞘口　鞘口には金銅板の筒金物が配される。長さ54㎜、残りの良い中ほどの位置で長径33.5㎜、短径20.2㎜、厚さ0.7㎜、全周長86.0㎜。鑞付けなどの接合線は観察できない。鍔側は破損が大きく、本来はこの内部に収まっていた鏃と鞘木が観察できる。鞘木は、鞘口筒金物の端から16㎜奥まったところで直線的な面をもち（⑦）、この空間が鏃の収まるスペースとなる。ところが鏃の奥行きは19㎜ありこのスペースより３㎜長いために、刀身を鞘に納めた状態では鏃が鞘に納まりきらず、鍔との間に３㎜の隙間が生じることとなる（⑧）。

鞘間（さやあい）１　鞘間の上半には、金銅板の伏板が良好に残る。伏板には円形浮文（半球形の打ち出し）が２列８段、計１６個打ち出される。円形浮文の直径は⑨で9.4×8.2㎜、⑩で9.2㎜。多くは頂部を破損している。出土時には既にこのように破損していたことから、前述の追葬時改変による破損の可能性がある。なお、金銅板が可塑性を持っていた時点での凹みが２箇所（⑪）ある。これは佩用時～副葬時に変形したものだろう。個々の円形浮文の周囲には、タガネ打ちによる円形縁取りが２列打たれる。上記円形浮文の隙間は蕨手状の渦文タガネ打ちで充填される。基本的な文様原理は、中軸線上に大きな渦、左右両脇に小さな渦を配置し渦はいずれも時計回りに巻くが、２箇所だけ（⑫）は３つの渦が同じ大きさ、刃側の渦が逆巻きという点で原理が崩れている。伏板の両端（短辺）は、責金具の下に押さえられていて外観には表れないが、責金具が破損している個所（⑬）で観察できる。端部はごくわずかに表側へ折れている。切断時のカエリ（バリ）の可能性もあるが、円形浮文を表にしてタガネ裁断したと想定するとカエリの向きが逆であることから、おそらく責金具の掛かりを良くするための意図的な折りではないか。なお、この責金具の下になっていた箇所には、繊維状の有機質が残存付着していた（⑭）。二次的に付着したとは考えられず、責金具と伏板の隙間を埋めて固定を強化するための充填材と考えられる。材質は不明。上記伏板は、４箇所の鋲（⑮⑯⑰⑱）によって鞘木に固定される。鋲は銅地で、金装されていたと考えられるが鍍金面は表面上観察できない。錆ふくれの少ない⑮で鋲頭径1.8㎜。⑱は鋲頭が欠落している。伏板表面（⑲）にブロンズの小塊が二次的に付着しており、これが⑱の鋲頭にあたるかもしれない。佩表に金銅板の伏板が良好に残存しているのに対して、

佩裏には金属製の装具が全く残されていない。本来金銅板などの金属製鞘巻があったとすれば、責金具や伏板、鋲の下に痕跡が残るはずだが、錆を含めてそういった形跡は全く無い。したがって、痕跡を残さずに完全に脱落したか、意図的に外された可能性を捨てきれないながらも、もともと佩裏には金属製鞘巻が無かったと考えられる。刀身の錆によって佩裏は膨張し本来の形状をほとんど保たないが、ごく一部（⑳）に鞘木の表面が皮膜状に面をもち、鞘木表面が“生きている”箇所がある。本来の鞘木表面は漆塗りなどで加飾されていたか、有機質の鞘巻があった可能性も残る。

鞘間筒金物　鞘間には金銅板の筒金物が配される。長さ87㎜、周囲長は柄側～鞘尻側でほとんど差が無く82.4㎜。背側に鑞付けの接合線が観察される（㉑）。柄側の端部では、接合線を境に端部が食い違い、段差となっている。

鞘間２　前述筒金物から先は、鞘の外装が破損し刀身が露出している。わずかに佩表の伏板が一部だけ残り、円形浮文２個分が認められる。佩裏は鞘間１と同様に、鞘巻きにあたる金属製の装具は痕跡も残されていない。

責金具・佩用装置　鞘の責金具は３箇所（㉒㉓㉔）に残る。本来は鞘間２と鞘尻筒金物の境にもう１つ、計４つの責金具があったとみられる。幅は㉒㉔が6.2㎜、㉓が5.4㎜、全周長は柄側の破損・サビの為計測不能。断面形は前述した柄元の責金具と異なり、中空の緩やかなＵ字形をなす。中実の蒲鉾形ではない。横佩の２足佩用の場合、㉒と㉓の責金具の位置には小環を造りつけた（環付）足金物が配されるが、本例の場合小環が脱落した痕跡も無く、足金物など一般的な佩用装置は設けられていない。

（３）大刀の型式と評価

本資料は柄頭が欠損した状態で出土した。以下記すように、拵えの特徴からみて柄頭の型式は双龍環頭であった可能性が高く、円頭の可能性もわずかに残る。本例の拵えをみると、全体が金銅装で連続タガネ打ちによる文様線刻、佩表に２列円形浮文を打ち出した金銅伏板、という特徴をもつ。これはTK209型式併行期（ほぼ出雲４期）に多くみられる規格的・斉一的な装具である。この時期、双龍環頭・頭椎といった主要な柄頭型式のほか、円頭・圭頭の一部も共通した拵えをもつものが増加し、柄頭型式を超えた装具の斉一化が認められる。この結果、柄頭を欠いて出土した場合に、柄頭の型式を特定することが困難である。ただし鍔などの特定部位には型式との関係を固持している。本例の場合、鍔は大型の有窓鍔ではなく、小型で無窓の喰出鍔である。また柄平面形は直線的でえぐりが無い。この特徴は多くの双龍環頭大刀に採用される拵えであるが、群馬県川内天王塚古墳例（第９図）のように円頭大刀にも採用されている。したがって、本例は装具斉一化・量産されたTK209型式併行期の双龍環頭大刀新段階（新納Ⅵ式）である可能性がまず指摘できる。

この段階の双龍環頭大刀は細かい文様構成などを除けば全体の素材や技法に画一性が高いのが特徴である。ところが本例にはいくつかこれに反する問題点がある。ひとつは佩用装置が無い点。通例では鞘間の責金具２箇所（第８図㉒㉓）には背側に小環が付き、横佩のための足金具となるのが一般的である。ところが本例の場合は小環がつかず、剥離した形跡なども一切無い。このように佩用装置を持たない金銅装大刀はいくつか事例が知られるが、多くはバリエーションの多い圭頭大刀の事例である。これらの圭頭大刀は鞘の拵えも全く異なり、主流型式の製作者とは異なる地方生産を含めた生産背景が想定されている。ふたつめの問題点は鞘佩裏の金銅装が全く残されていない点。これは二次的

に脱落したり完全に腐朽した可能性を捨てきれないながらも、本来から金銅板が無かった可能性が高い。上記２点の特徴は、規格的な双龍環頭大刀の拵えと比較するとかなりイレギュラーであり、注意される。現状では評価の定まらない所であるが、規格的に集中生産された双龍環頭大刀とはやや異なる性格も考慮せねばならない。

（４）被葬者の位置づけ

本例は横穴墓群中の出土であった。玄室規模や形態、他の副葬品内容からみても、他の横穴墓と比較して傑出する要素はなく、この大刀を佩用し得た被葬者像が問題となる。出雲地域の装飾付大刀の型式分布に関する大谷晃二氏の分析によれば、TK43型式併行期（Ⅰ段階）とTK209型式併行期（Ⅱ段階）では大きく様相が異なることが指摘されている。出雲西部ではⅠ段階に捩り環付大刀を中心とするいわゆる倭装大刀が大念寺古墳→上塩冶築山古墳という最高首長墳に副葬されており、出雲東部の首長が環頭大刀を中心とするいわゆる大陸系大刀を所有するのと対比される。これがⅡ段階になると出雲東西での大刀系列の排他的分布はなくなり、加茂町三代古墳、仁多町原田古墳のような周辺地域の中小古墳へと装飾付大刀佩用者層が拡大していく。本例はそうしたⅡ段階における変化を如実に反映した事例と評価できる。すなわち、上塩冶横穴墓群は出雲西部の最高首長の基盤を支持した集団の大墓域である。物部氏の可能性を指摘される中央豪族との結びつきのなかで、上塩冶築山古墳の段階までは倭風大刀分布の中心地域であった。これが中央における政治変動や生産体制の再編・統合などの結果、出雲西部にも放れ山古墳を初め本例のように大陸系大刀が出土するようになる。また出雲東部では安来平野を中心に龍鳳環頭大刀を副葬する横穴墓がみられるが、出雲平野では本例が横穴墓から定型化した装飾付大刀が出土した初の事例である。（銀装圭頭大刀を出土した出雲工業高校裏横穴墓があるが、この大刀は規格性に乏しく同列に扱えない。）こうした龍鳳環頭大刀は規格化され量産されたものであり、特定の職能や身分を表徴するものとして、埋葬施設の規模などには反映されない秩序によって分与されたものと考えられる。出雲東部（安来平野）の事例が例えば舎人など中央へ出仕し特定の職能を与えられた階層の人物と想定されるように、出雲西部の中心地域においても横穴墓に埋葬されながらも中央との強い結びつきを持ち、特定の職能などを介在して組み込まれていくシステムが及んでいたことがうかがえる。このように本例は出雲と中央の関係性の変化や、大刀佩用者の社会的位置づけを考える上で重要な資料となった。

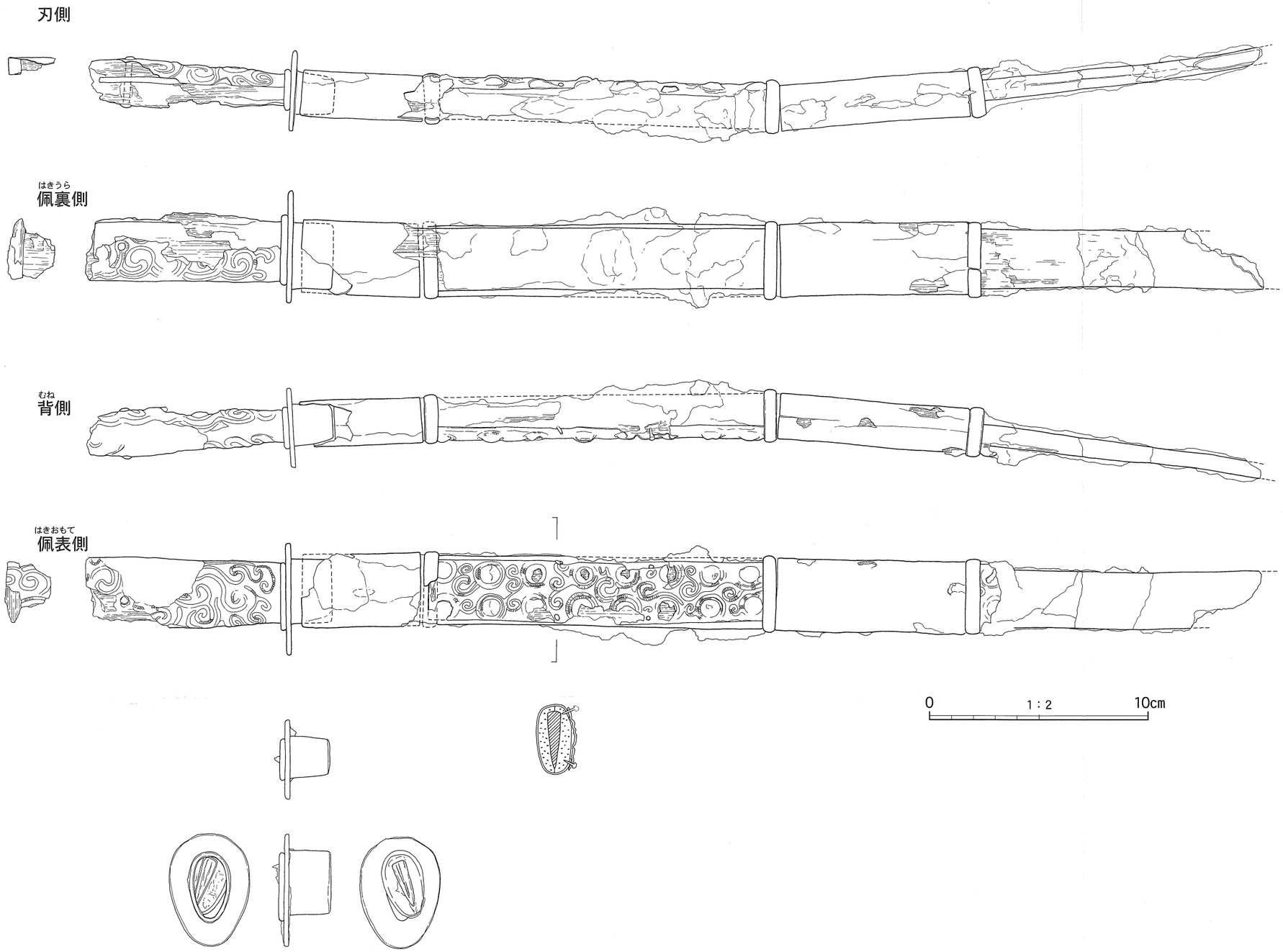
【参考文献】

大谷晃二　1999「出雲の地域政権と大和政権－金銀装大刀にみる出雲の東西－」『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター

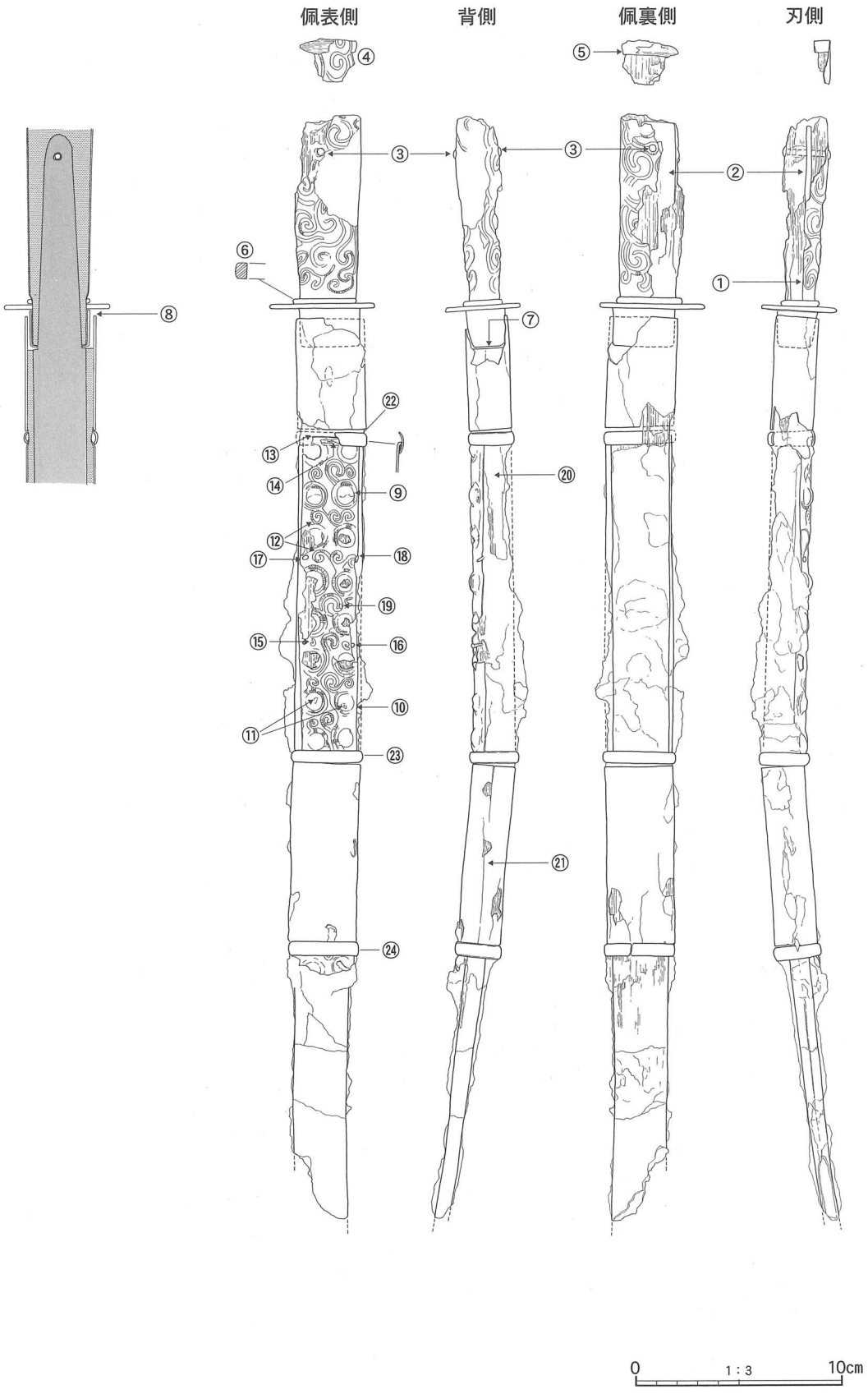
松尾充晶　2001「装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター

松尾充晶　2003「身分表徴としての装飾大刀」『鉄器研究の方向性を探る－刀剣研究をケーススタディとして－』第９回鉄器文化研究集会、鉄器文化研究会

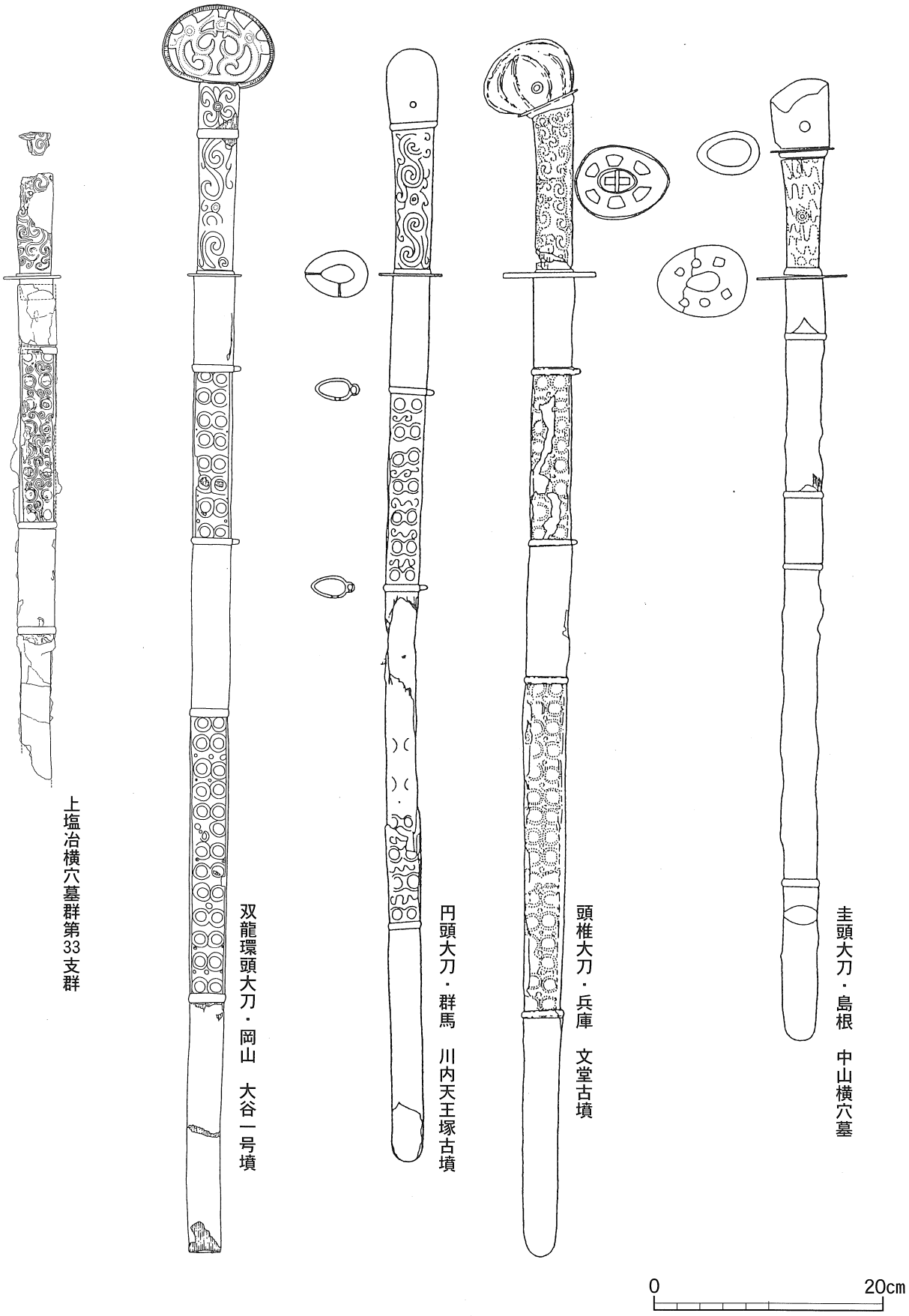
松尾充晶　2003「装飾付大刀」『考古資料大観　第７巻　鉄・金銅製品』小学館



第７図　金銅装大刀　実測図（Ｓ＝１：２）



第８図　金銅装大刀解説図（Ｓ＝１：３）



第９図　関連装飾付大刀実測図（Ｓ＝１：５）

5．上塩冶横穴墓群出土金属製品の保存処理及び修復

株式会社　トリアド工房

はじめに

平成14年度、出雲市より委託事業として金属製品の保存処理及び修復を請け負わせていただく運びとなった。金属製品は、平成２年度の発掘調査で出土した33支群の金銅装大刀と、平成13年度の発掘調査で出土した８支群の鍔断片２点であった。これら遺物について、７月から保存処理および修復作業を実施した。その修理内容について報告を致します。

Ⅰ　修理前遺物の状態

金銅装大刀　長さ40cmの刀身部分の断片を中心に、接合不可断片および剥落した金銅片多数が残存していた。遺物には泥や錆が付着し、刀身は中程で曲がりを生じていた。金銅装部分は厚い緑青錆に覆われていたが、各所に金色も認められた。

鍔　長さ3.5cmと長さ4.1cmの２点、窓を有している。外周縁に深い亀裂が多々あり、泥が付着していた。肉眼では確認できない状態であるが、Ｘ線調査では銀象嵌文様が確認されていた。

Ⅱ　修理実施内容

①修理前調査　②保存処理前作業　③保存処理作業（洗浄、脱塩、強化）　④修復作業
⑤修理後記録

Ⅲ　修理工程

①修理前調査　法量、写真撮影、顕微鏡による調査、科学的調査

②保存処理前作業　接合可能断片の仮接着、銅錆除去、遺物保護作業（包布）

③保存処理

a　洗浄　純水およびエチルアルコールによる洗浄

b　脱塩作業　◎金銅装大刀

減圧下で、ベンゾトリアゾールエチルアルコール溶液を遺物に注入し、遺物が液に浸った後常圧に戻し、50日間浸漬状態とした。処理期間経過後、エチルアルコールで洗浄し乾燥させた。

◎鍔

減圧下で、水酸化リチウムエチルアルコール溶液を遺物に注入し、遺物が液に浸った後、常圧に戻し、50日間浸漬状態とした。処理期間経過後、エチルアルコールで洗浄し乾燥させた。

c　強化作業　遺物強化の為、減圧下で30％アクリル樹脂NAD-10石油ナフサ溶液を遺物に注入し、遺物が液に浸った後常圧に戻し、10時間浸漬した。処理時間経過後、石油ナフサで洗浄し、赤外線ランプで充分乾燥させた。

２回目の強化作業として、上記の手順を繰り返し行った。石油ナフサ洗浄時には、保護用包布を外して細部の樹脂溜まりの除去作業をした。

④修復作業

◎金銅装大刀

充分な強度に達したことを確認した上で、接合関係の確実な断片をエポキシ樹脂で元の位置に接合した。鉄刀は錆膨れにより変形し、芯部に空洞化も生じていたが、鞘木が鉄刀の錆を吸い、鉄刀の輪郭を残していた。接合時には芯材を入れて補強とし、現状の形を生かすこととした。

また欠失部分は、エポキシ系充填材（エポキシ樹脂にガラスマイクロバルーンまたはフェノールマイクロバルーンを混入したもの）を用いて修復し整形した。細部の修復は、依頼者からの図面による指示に基づいておこなった。

◎鍔

X線写真から銀象嵌文様図を起こした。外周縁部分の亀裂を修復した。亀裂部分にはエポキシ系樹脂を充填、修復した。

錆の除去作業後、改めて2断片の接合関係を検討したところ、相互に接合できることがわかった。そこで2断片をエポキシ樹脂で接合した上で、象嵌の表出作業に入った。表出は微鏡下でおこなった。当鍔断片の象嵌には、X線写真にもみられるようなカスレが生じていた。土中にあった影響なのか、象嵌部が錆化して黒褐色となり、そのため鉄と銀との境に不明瞭な部分がみられた。象嵌の銀線は、巾0.4-0.6㎜と観察され、その断面はV字形であった。

表出後、細部の修復をおこなった。

金銅装大刀、鍔とも、樹脂補填部にはアクリル絵具で着彩した。遺物の安定を図るため、低濃度のアクリル樹脂を塗布した。

⑤修理後記録　法量、写真撮影、修理図

金銅装大刀	残存長	535㎜	重さ 476g
鍔断片	残存長	71㎜	重さ 35.4g

Ⅳ　修理期間　自　平成14年7月10日

至　平成15年3月28日

おわりに

金銅装大刀の保存処理および修復では、発掘後の経年もあり、当初の姿容に出来る限り近づけるように試みた。剥落断片についても同様に、本体に戻すよう心掛けた。

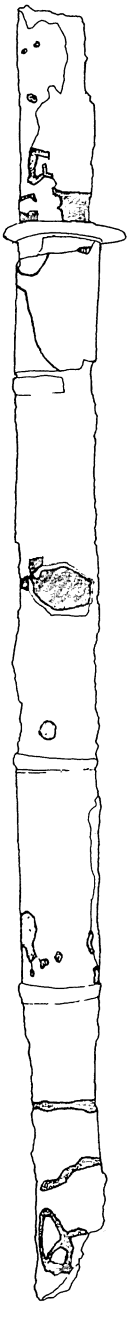
鍔に関しては、銀象嵌文様が観察可能となった。

文化財室の方々には、修理に必要な資料を御提供いただいた。改めて御礼申し上げます。

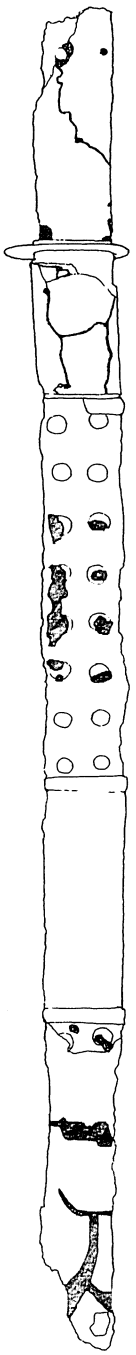
修理実施者　永嶋千鳥（トリアド工房嘱託）

金銅装大刀修理図

接合不可断片



B面



A面

錆除去後文様図

折損接合部分

修復部分

修理前写真

B面　　A面

修理後写真

B面

腹側

A面

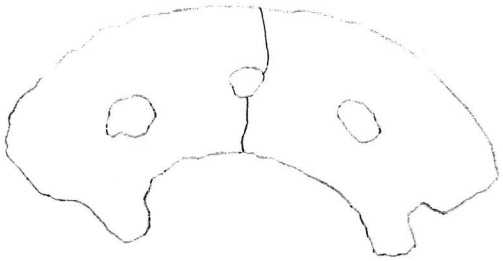
鉄製銀象嵌鍔断片

修理前

断片１

断片２

修理中



接合

修理後

象嵌表出後

X線写真

銀象嵌文様図

図　　版

第33支群（車の上方）

1・2 号穴近景（中央左）

1・2 号穴（右が 1 号穴）

図版 2

1 号穴石塔混入状況

1 号穴金銅装大刀出土状況

1 号穴金銅装大刀出土状況

1 号穴金銅装大刀出土状況

2 号穴調査前

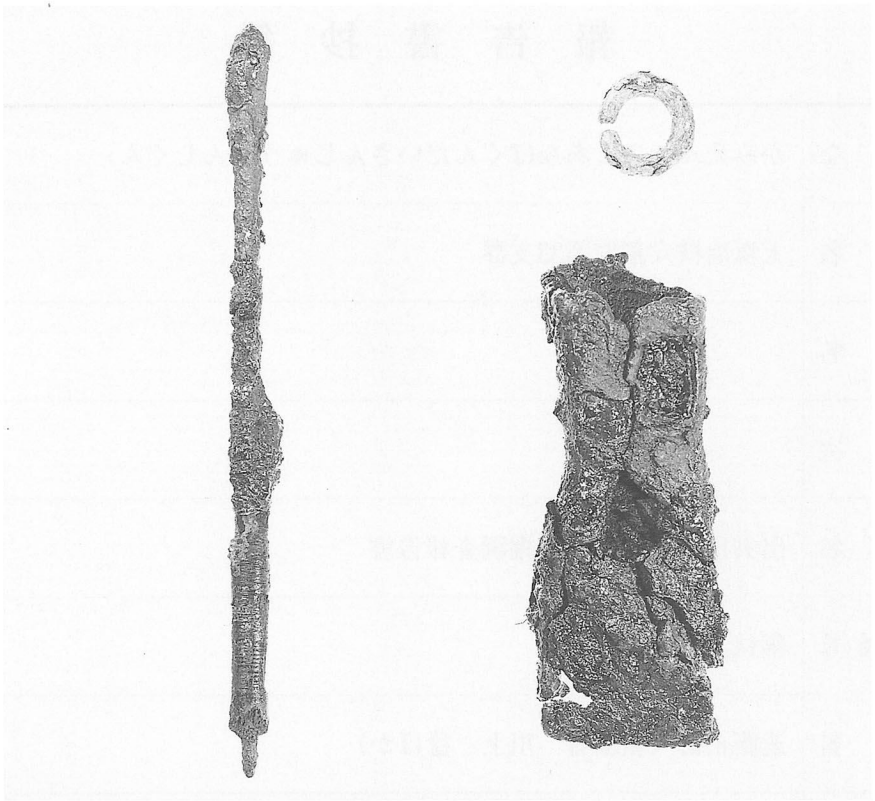
2 号穴石塔混入状況

図版 4

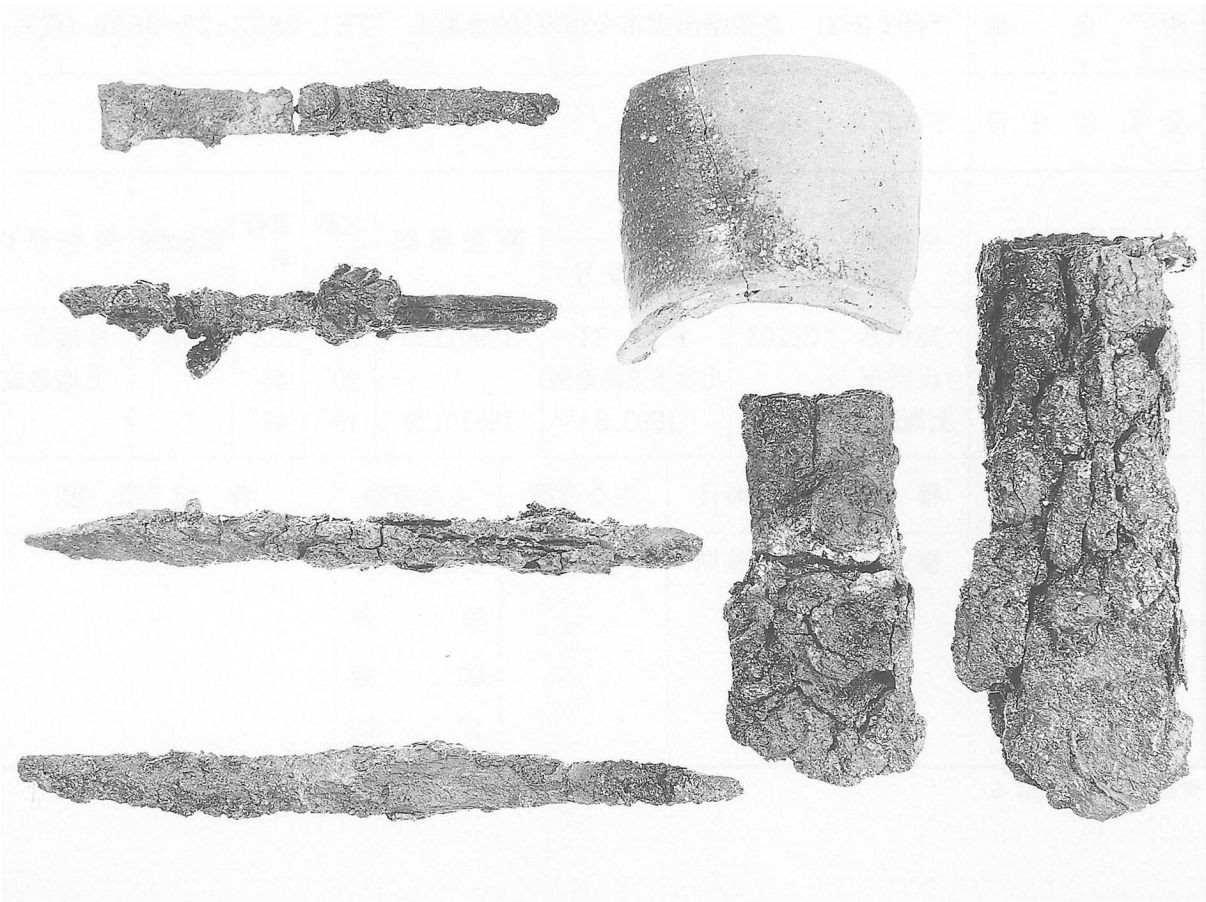
2 号穴鉄斧出土状況

2 号穴調査後

調査後（造成中）



1 号穴出土遺物



2 号穴出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみえんやよこあなぼぐんだいさんじゅうさんしぐん
書名	上塩冶横穴墓群第33支群
副書名	
巻次	
シリーズ名	出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第14集
編集者名	遠藤正樹（執筆者　川上　稔ほか）
編集機関	出雲市教育委員会
所在地	〒693-8531　島根県出雲市今市町109番地１　TEL 0853-23-3636（代）
発行年月日	平成16年（2004）３月30日

所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	北緯※	東経※	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上塩冶横穴墓群 第33支群	島根県 出雲市 上塩冶町	32203	Ｆ20－33 出雲市遺跡地図 1993.3	19901220 ～ 19910129	35° 20′ 19″	132° 46′ 47″	20m²	浄福寺 土地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上塩冶横穴墓群 第33支群	横穴墓	古墳後期	横穴墓	金銅装大刀 鉄斧 鉄鏃 耳環	

※日本測地系による

出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書
第14集

2004年3月

発行　出雲市教育委員会

印刷　㈲ナガサコ印刷